

ハーバード・燕京・同志社

東方文化講座シリーズの終刊に際して

一九五三年（昭和二十八年）に發足したハーバード燕京同志社東方文化講座シリーズは、その第十四冊目の刊行を終えて、ここにひとまず刊行を打切ることとなった。いまその終刊に際して、東方文化講座委員會が、過去數年にわたつて營なんできた若干の事業を回顧して、もつてそれらの事業に、直接間接の支援をあたえられた諸氏への挨拶と、またその謝意を表明したいと思う。

一九五二年（昭和二十七年）の秋の終りの頃であつたかと思うが、當時ハーバード燕京研究所の所長であつたエリセーフ氏が來日されて、東京および關西における公私の大學を歴訪せられたが、それが同研究所の資金の供與さき選定のものであつたことは、後日になつて始めて明らかにされたところであつた。エリセーフ氏が同志社を訪れたのは、同氏と親交のあつた梅原末治氏の東道によるものであるが、當時においては右資金のことについては、なんら明らかにされるところがなかつた。そして翌一九五三年（昭和二十八年）の四月になつて、米國の新會計年度たる七月以降一年間を限つて、總額七千ドル（邦價にして約二百五十萬圓）の金額を贈與するという通知が同志社總長あてに送られてきた。そして、そのうち四千ドル（約百五十萬圓）は東方文化に關する書籍の購入費として、また三千ドル（約百萬圓）は、同志社における東方文化に關するレクチャーの開講費としてであつて、その他に資金の使途についてな

んらの指示も制約もなかつた。そしてこれは後日知つたところであるが、このハーバード燕京研究所の資金は、同志社以外にわが國では、京都大學人文科學研究所や國際基督教大學等にも、それぞれその使途についての條件や金額を異にして供與せられたものの如くである。なお右資金は、筆者の一片の想像以上には出ないけれども、從來中國の燕京大學附設の哈佛燕京學社その他に寄せられていたものが、今次中國の政變にともなつて打切られ、そしてその資金の若干が、改めてわが國の東方學研究の資として轉與されるにいたつたもののようである。なおまたハーバード燕京研究所運營の資金は、同研究所に寄附せられた巨大な土地の收益によるものとのことであるが、右土地の寄附者の資金運營の條件のひとつとして、キリスト教主義の大學にということが謳われていると仄聞している。もし然りとすれば、從來東方學に關して全然不毛の地であつた同志社に、特に選んで該資金が贈與せられたことに、一應の理由が見出し得ないでもないが、さらにいまひとつの理由を穿鑿すれば、梅原末治氏の母校同志社に對する好意的な斡旋も、大いにあづかつて力あつたものというべきであらう。

とにかく同志社大學では右資金の供與決定の通知を受けると同時に、ハーバード燕京同志社東方文化講座委員會を組織し、上野直藏、高橋貞三、吉川秀造、石田一郎、および筆者の五人に委員を委嘱し、服部史郎氏を經理責任者として任命した。そしてただちに中國古典、殊に通常一般に必要とする基礎的な叢書や類書や史書類を中心として蒐集にとりかかつたが、他方また東方文化講座を開講することとした。そしてその講座の第一回は貝塚茂樹氏の「中國民族の成立」を連續四回にわたつて、また第二回は吉川幸次郎氏の

「中國文學序説」を四回にわたつて、第三回は加藤常賢氏の「中國古代の宗教と思想」を、これまた四回にわたつて開講した。

一九五四年（昭和二十九年）度においては、従来の東方文化講座を二つに分けて、ひとつは公開講座として一般の聴講者を対象とし、他は學内の常設講座として、もっぱら學内の學生を対象とし、かつ希望によつては單位を修得し得るものとした。そしてこの年度における第一回の公開講座は、小島祐馬氏によつて「中國の政治思想」を、第二回は梅原末治氏によつて「考古學上より見たる中國古代の文化」を、そして第三回目と第四回目とは、和田清氏による「東洋史上より觀たる古代の日本」と、佐伯好郎氏による「中國における景教衰亡の歴史」とを、五月十六日から四日間、午前と午後とに分けてそれぞれ開講したが、これは主として講師の都合により、次年度の一回分をくりあげて開講したものである。時あたかもエリヤフ氏が入洛せられたのを機會に、同氏をかこみ、講師をまじえて、南禪寺の瓢亭に相會して、一夜歡談の席をもつことができた。

一方、學内の常設講座は、學生に中國の通史の知識をあたえることを目的として、古代から後漢までを宮崎市定氏に、三國から唐までを宇都宮清吉氏に、五代から明までを田村實造氏に、清朝以降を安部健夫氏にお願いして、それぞれ専門の領域から分擔講義をしていただくこととした。

一九五五年（昭和三十年）の公開講座は、前記のごとく和田、佐伯兩氏の講義のひとつをもつて、この年度の第一回目のそれに充當することとなつていたので、その第二回目として、福井康順氏の「老子崇拜の諸相」を、第三回目は塚本善隆氏によつて、「印度佛教から支那佛教への展開」をそれぞれ開講した。なおこの年の七月

には、臺灣大學教授勞幹氏が、米國より歸學の途次來日せられたので、われわれの委員會と東方學會との共催の形で、同志社を會場として同氏を圍み、居延漢簡および中國の古代文化を中心とする座談會を催したが、吉川幸次郎氏が通譯の勞をとられ、關西各地から五十數名の參會者を得てきわめて盛會であつた。

なおこの年度における學内常設講座は、木村英一氏の「中國固有思想における宗教的要素」、筆者の「漢代の法思想」、守屋美都雄氏の「六朝時代の家」、平岡武夫氏の「漢字整理の問題」、重澤俊郎氏の「支那思想の特殊問題」を、それぞれ週一回づつ四週間にわたつて開講した。

かくて、ハーバード燕京研究所から資金の供與をうけてきた四年目の一九五六年には、同研究所の所長となられたライシャワー氏から、次年度からは一般的に、從來のような資金の供與方法を基本的に改めることとなつたので、従つて從來のような形における資金の供與は本年をもつて打切ることとするという内示に接したが、委員會は公開講座に關しては、本年もまた從來のとおり、年三回開催することを決定した。従つて公開講座の第一回目は、神田喜一郎氏の「中國書法の二大潮流」を、第二回目は三品彰英氏の「北鮮と南鮮」を、第三回目は石田幹之助氏の「支那のキリスト教」を開講した。また九月にはハーバード燕京研究所から歸國の途にあつた臺灣大學教授董同龢氏を同志社に迎えて、勞幹氏の場合と同様に東方學會と共同主催で、小川環樹氏の通譯によつて、「最近における中國語の研究」と題する同氏の講演をきき、それを中心としてなごやかな座談會をもつことができた。

以上が一九五三年から五六年にわたる四年間における公開講座と

學内常設講座との概要であるが、もともとハーバード燕京研究所からの資金の供與は、嚴格に一年づつの期間を限つたものであり、そのため二年ないし三年の計畫性をもつた企畫を立て得ない憾みがあり、この點は資金を最も効果的に使用していく上で、委員會のもつとも苦慮したところであることを告白しておきたい。しかしながら同志社がキリスト教主義の學園であるということと、またハーバード燕京研究所の資金の寄附者の意志に多少とも沿つて、中國の宗教に關する講座を繰り込んでいきたいという委員會のひそかなる願いは、加藤常賢氏の中國古代の宗教思想、木村英一氏の中國人の宗教性の問題、福井康順氏の道教、塚本善隆氏の中國の佛教、佐伯好郎氏の景教、石田幹之助氏の元代におけるキリスト教などの講座によつて、一應はみだし得たということができるかと思う。ただ最も遺憾とするところは、これらの講師諸氏の講義を、ことごとくは東方文化講座シリーズ中に收め得なかつたということで、學界のためにもまことに申譯のないことであつたと考へているが、それはいつに筆者の努力不十分であつたことに由るものである。とりわけ痛惜に堪えないのは、「中國人の天下觀念——政治思想史的試論」の力作を寄せられた安部健夫氏が、昨年二月二十日に急逝せられたことで、ここに謹んで弔意を表する次第である。

なお次に、上記の諸氏の執筆にかかる東方文化講座のシリーズ名を掲出しておきたいと思うが、その題名が公開・學内兩講座におけるそれと若干異なるものがあるのは、それは講師の都合によつて改められたものであることを付言しておきたい。

一 中國の政治思想

小 島 祐 馬

二 漢代家族の形態に關する考察

守 屋 美都雄

- 三 中國古代の宗教と思想 加藤常賢
- 四 支那古代に於ける合理的思维的展開 重澤俊郎
- 五 北鮮と南鮮 三品彰英
- 六 中國人の天下觀念——政治思想史的試論 安部健夫
- 七 中國に於ける景教衰亡の歴史

付 キリスト教の成立に及ぼしたる

ローマ法學思想の影響

佐伯好郎

八 中國古代史概論

宮崎市定

九 東洋史上より觀たる古代の日本

和田清

十 北アジアにおける歴史世界の形成

田村實造

十一 中國固有思想に於ける捨身と祈りについて

木村英一

十二 中國における言語調査

董同龢

十三 中國書法の二大潮流

神田喜一郎

十四 漢字の形と文化

平岡武夫

以上、東方文化に關する公開講座および學内常設講座の開催、東方文化に關するシリーズの刊行、ならびに東方學研究に要する一般的基礎的な書籍の蒐集と研究室の設置、これらがハーバード燕京研究所の資金による主たる事業であるが、なお付帶的に一、二の研究や調査の完成を見たことを報告しておきたい。

第一は共同研究の形をとつて漢書刑法志の譯注を行なつたことである。これは一九五六年（昭和三十一年）の七月から着手したもので、共同研究の参加者は重澤俊郎、平中耆次、西田太一郎、森三樹三郎、守屋美都雄の五氏と筆者と、および日原利國君がこれに加わつた。このように從來の企畫を改めて、共同研究を行なうにいたつ

た一般的な事由は、從來の公開や學内の兩講座の運営について、いまだ基本的な考へてみなければならぬ段階に立ちいたつたことと、折角蒐集した文獻や研究室の設備を死蔵することなく、この際積極的に活用すべきであるという意見が委員會内に生じてきたことによるものであるが、特に漢書の刑法志を研究對象に選んだのは、委員會の委員のひとりである筆者が、たまたま中國法制史を専攻していたということと、漢書刑法志が歴代正史の最初の刑法志であること、さらに、漢書に關しては参照すべき注釋書も、校合に資すべき古版本もまた多いというようなことなどが考慮にいれられてのことである。そしてこの譯注は、着手してまる一年後の一九五七年（昭和三十三年）の七月に一應終了し、その間、その譯注は、未定稿として「同志社法學」に數回にわたつて掲載し、譯注終了後、約半歳を全體的な修正のために充當し、一九五八年（昭和三十三年）三月に、ハーバード燕京同志社東方文化講座委員會の名において出版した。この譯注は、われわれ共同研究の参加者一同の責任において、當時萬全を期して行なつたものではあるが、今日となつてみれば、不識の誤謬や粗漏も、また考察必ずしも十分でないところも、さらにまた若干の誤植も見出されるわけであつて、もし適當な機會を得ることができれば、補正を行ないたいと願つてゐる。また漢書刑法志の譯注終了後は、ただちに晉書刑法志の譯注にとりかかつたが、やはり同一のメンバーと同一の方法によつて行なつてゐる。しかるに着手ののち、研究會をもつことすでに九十回をこえているにかかわらず、遅々として譯注は進捗してゐないが、それはいつに晉志の難解なことによつてゐる。そしてこの晉志の譯注も、また未定稿として「同志社法學」に五回にわたつて掲載してきてゐる。もし

同學の示教を得ることができればきわめて幸いである。

いまひとつ付記すべきことは、「米澤善本の研究と解題」の上梓である。これはもちろん東方文化講座委員會の本來的な事業ではなく、付帶的偶然的な仕事にすぎないが、われわれが漢志の譯注を試みるにあたり、米澤に現存する上杉家秘藏の慶元本漢書との校合を是非とも必要としたため、筆者は漢志譯注のメンバーである平中孝次氏と同行して、一九五六年（昭和三十一年）の盛夏米澤におもむき、慶元本漢書全卷の寫眞撮影を行なつたのであるが、それを機縁として、上杉家舊藏の善本と、藩費興讓館の所藏本との調査を依頼せられ、かつそれによつて藏書目録を作製し、米澤市制七十年の記念事業の一として、右藏書目録を出版したいという希望が寄せられるにいたつた。そして委員會は、米澤善本の學界への紹介の意義と價值とを認め、この事業に積極的に協力することとなつた。そこでハーバード燕京研究所の許諾を得るとともに、また京都大學人文科學研究所を中心とする多數の諸氏の協力を要請して、一九五七年八月の下旬に、一行十數名が大舉して米澤に出かけ、八月廿一日から月末までの十日の間に、無慮數萬卷におよぶ書冊を、いちいち克明にカードに採録するとともに、善本については解題を作成し、寫眞を撮影し、まさに一氣呵成不眠不休の勢をもつて調査を敢行した。かくて九月の一日、一行はそれらの調査資料をたずさえて歸洛の途にいたが、爾後の日子の間に、それらの資料によつてまとめあげたものが米澤善本の研究篇と解題篇とであり、カードの整理と諸板本との比較検討のすえにできあがつたものが、興讓館の舊藏和漢書目録である。調査當時の状況は、同書の序文に記しておいたのでここには省略するが、とにかく短時日の現地における調査と、早急にその

成果のとりまとめが要請せられていたため、執筆者各位においても、意にみないところをさだめて多くもたれているであらうけれども、かつていまだ整理という整理を経ずして今日にいたつてゐる藏書であり、従つて圖書臺帳と呼ぶに値する臺帳をもたず、檢索の要に供し得る満足なカードさえ作製されていなかった當時の米澤圖書館の状況をおもえば、まさしく未曾有の成果であつたといつても、決して過言ではなからうと思われるし、また廣く江湖の愛書家や研究者に對しても、裨益するところすくなからざるものがあることを確信している。殊に善本については研究篇と解題篇とを設け、かつ善本の書影を豊富に掲載し、さらに和漢の全藏書の目録を付し、善本の研究と解題と藏書目録とを相互に連繫あらしめて、もつて檢出や研究に便宜を供しようとしたこの試みは、在來の書籍目録にはかつて見ないところであつて、書目の新しい型を示すものとして、なにほどこかの意義と價值とを有するのではないかとひそかに自負している。

顧みれば一九五三年にこの委員會が発足以來、公開講座や學内常設講座に、また漢書晉書の刑法志譯注の共同研究に、さらにまた米澤藏書の調査や目録の作製など、委員會の事業に直接協力してくださった方々だけでも、數十人になんなんとするのではないかと思われるが、それらの方々の深い理解と協力とによつて、とにかくこれだけの事業が、甚だしい蹉跌なくして行ない得たことは、その運営に一半の責を有する筆者として、心から感激に堪えないところである。ただハーバード燕京研究所の資金が、當初から三年なり五年なりの長期の計畫のもとに使用することが許されておつたならば、いまま少し他に企畫のもちようもあつたのではないかと思われるが、こ

れはまさしく死兒のよわいを數えるにひとしいかも知れない。それにつけても、筆者ひそかにおもうのであるが、われわれが組織だつた、やや長期にわたる研究計畫を行なおうとすれば、その最少限度の研究資金を、必ずや他に、あるいは外國に求めなければならぬというこの現實、そしてそれなくしては何事をもなし得ないというわれわれの研究生活の貧しさみじめさは、いつの日にか解消し得るのであろうかと。

(内田智雄)